

時衆の清規について

河野憲善

清衆の規矩の意であつて衆僧の日常生活の規則のことである。唐の百丈清規がその嚆矢であるという。本邦禪家にあり、その他にもある。

時衆は二祖他阿以後、独住道場の僧衆が年とともに増加したが、宗祖一遍在世の砌はもとより、遊行時衆が本来のあり方であり、清規と称するものがあれば、他山とその内容が異なる。坊舎を有たない貧困な諸国遊行の教団だからである。

一遍の他力とは本願名号による一類往生のことであるが、これを依法不依人とする。この否定が肯定となり、自なるものを捨てるのが、空也の捨身の憧憬となつた。聖絵第七に、

遁世のはじめ「空也上人は我が先達なり」とて、かの言どもを心にそめてくちずさみ給ひき、中略、この文によりて始め四年は身命を山野にすて、居住を風雲にまかせてひとり法界をすゝめ給ひき。おほよそ済度を機縁にまかせて、徒衆を引具し給ふといへども、心諸縁をはなれて身に一塵をもたくはへず、一生ついに絹綿

時衆の清規について（河野）

のたぐひはだにふれず、金銀の具手にとる事なく、酒肉五辛をたてて十重の戒珠を全うし給へり。

とある。文尾は聖道の立場において円頓戒脈を全うしたということでは、もとよりなく、順彼仏願の慈悲行の外相である。曾つて円頓戒伝戒の伝はない。

さきの文の直後、弘安七年夏桂にて病惱あり、その時の法語に、

それ生死本源の形は男女和合の一念、流浪三界の相は愛染妄境の迷情なり。男女形やふれ妄境おのづから滅しなば生死本無にして迷情こゝにつきぬべし。花を愛し日を愛するやゝもすれば輪廻の業、ほとけをおもふ、ともすれば地獄のほのほ、たゞし一心の本源は自然に無念なり。

これより先、弘安元年「他阿弥陀仏はじめて同行相親の契をむすびたてまつりぬ。惣じて同行七八人相具して」とあり、その直後備前吉備津宮の神主の子息の妻が尼衆として加わつている。嚴冬に寒さと飢を凌ぐ術もない遊行時衆は、その成

時衆の清規について（河野）

立の初めから僧尼衆を擁していたのである。この一遍の文だけでは愛執の混乱を知ることにはならないが、これに縁由する二祖三祖の文になれば、漸く青年僧尼の愛執の問題に手を焼く統率者の苦悩が見られる。

弘安十年の春一遍は十二道具の持文を書き示している。これを「道具秘釈」と名づけけるが、恐らく後世の命名であろう。

南無阿弥陀仏 一遍弟子当レ信下用ニ十二道具心ト
一引入

南無阿弥陀仏 信ニ無量生命名号法器ニ心是則無量光仏徳也

引入とは椀、以下箸筒は無辺の功德衆生の心に入るを信ずる心、無辺光仏の徳。阿弥衣、善惡同じく撰する本願を信ずる心、無礙光仏の徳。袈裟、苦悩を除くの名号を信ずる心、無对光仏の徳。帷、火変じて風となり化仏を信ずる心、炎王光仏の徳。手巾、弥陀を一念すれば罪滅するを信ずる心、清浄光仏の徳。帶、恵光の圍繞すを信ずる心、歓喜光仏の徳。紙衣、行住坐臥臨終を信ずる心、智慧光仏の徳。念珠、畢命を期とし称名を信ずる心、不断光仏の徳。衣、是人芬陀利華なるを信ずる心、難思光仏の徳。足駄、最下の凡夫願に乗ずるを信ずる心、無称光仏の徳。頭巾、諸仏の密意を信ずる心、超日月光仏の徳。

本願名号中有ニ衆生信徳衆生信心上願ニ十二光徳ニ他力不思議

凡夫難シ思量ニ仰唱ニ弥陀名号ニ蒙ニ十二光益ニ南無阿弥陀仏一切衆生往生極樂

弘安十年三月一日 一遍

とある。

阿弥衣は網状の麻の外衣、鱗介を掬う教網に似て無碍光仏の徳とする。頭から被る時と肩から掛ける時とがある。袖のあるものが普通で、後世は専ら別時念仏に用いている。衣は裳に襲のない法衣であり裳無衣というが今日は直綴を用いている。

釈尊の源始サンガーが六物を現前僧物にしたことに、遊行教団の生活資具は似たところがある。しかも一遍の時衆は手巾にも帯にも一つ一つ阿弥陀仏の十二光の徳を拜して用いることを忘れなかつた。その後

此の行儀は徒衆をひきぐし給へる始よりさだめられけり。時衆も番帳には僧衆四十八人尼衆四十八人そのほかの四部の衆は数をしらず。又十二光の箱を作りて道具をいれ給ひき。

とあり。遊行の始めから十二道具の制が用いられたことが知られる。それらを十二光の箱十二に納め、賦算廻国に携行した、その箱の上は二河白道に象り青白赤の三色に彩り、置く時には僧尼衆の境とした。僧尼衆は目前に二河白道がある。

もう一つの特徴は十二光番帳に、僧尼衆各四十八字を十二光仏に配当し、四字一仏、八字一番、六番に分つて四十八願

を標示した。例えば無量光仏に他阿弥陀仏其阿弥陀仏覚阿弥陀仏重阿弥陀仏があり、無辺光仏に師法眼与があり八人で一番をなしている。尼衆も同様、生大東住闍了土衆が一番、六番四十八人をなし、更にこれを補うから時衆形成の始から阿弥陀仏が数人いることもあるし、師阿が何人もいる。後世はこの名字に軽重を生じ上足の用うる号が生じたが、当初には上下はない。人それぞれに法界身中の他阿弥陀仏だからである。時衆の正式の名は阿弥陀仏号であつて固有名詞が否定される、平等無差別の法界中にあるからであるが、後世の史家は同名の人が幾人もあり、取捨に困る実状にある。位階も僧名もない教団であつた。固有名詞を否定した宗派は、三國の歴史を通じて他にあつたであらうか。

「絵詞伝」第三に

尼僧の両方の隔てに十二の箱を置いて蓋の上に白き色を四五寸許一筋とおされたり。是は水火の中路の白道になぞらへて男女の愛恚をさけむがため也。数十二は十二光日没の礼讃の心なるべし。又は函蓋相応の儀、能所不二の理を表せられるにや。

とある。坊舎の隔離、交渉の方便を失つた貧しい教団には、十二光の箱だけで幾許の効があつたであらうか。

他の浄土諸宗と異つた特徴は六十万人知識が、頭陀勇猛、諸国を駆け巡つて賦算することである。「絵詞伝」の方が簡結であるからこれを挙げる。

時衆の清規について（河野）

この中に六八の弘誓を標して一乘の機法をあかす。因中の万行功を六字におさめ、果号の一切益を十方にほどこす。是即ち一切衆生決定往生の記別をさぐるものなり。

さらにその根源に熊野証誠殿の冥慮があつたという。「御房のすすめによつて始めて衆生の往生すべきにあらず、中略、信不信を論ぜず浄不浄をきはらず、ただ其の札を賦つて勸むべし」と。往生の主体は本願力であり、知識ではない、知識は決定往生せしめる力を有たない、ただ弥陀の弘願の実践形である念仏を諸国の民衆に弘めればよい。功を六字に収めてゐるから記別を与えればよい。一遍は弘安五年五月法印公朝に返報し「六十万人知識一遍」と自署している。六十万人とは一切衆生のことであり、かかる道号は他に例はなく、一寺に止住することのない諸国勧進の旅姿の自称である。「聖絵」第十二に「六十万人の融通念仏」とあり、旅に出でて旅に終り、諸国隅なく念仏を弘通することが融通念仏である。諸国弘通以外の原理はない。往生の主体は弥陀一仏であるが賦算の主体は六十万人知識である。本来一人であるべきであるが、早く聖戒は許され、二祖他阿の代さらに増えた。

弘安二年の冬一遍の一行は信濃伴野において、歳末別時念仏を修した。本来この行儀は歳末の行儀という特殊性をもつものではないが、爾来今日にいたるまで歳末に修せられる。しかし宗祖の代においても必ずしも歳末に限られたわけでは

ない。しかもこの時空也の先蹤を慕つて踊躍念仏が始められた。「無量寿經」に「踊躍大歡喜」、日中礼讚に「騰神踊躍入西方」とあるからである。と六条縁起は示し、

心王の如来自然に正覺の台に坐し、己身の聖衆踊躍して法界にあそぶ。これしかしながらみづからの行業をからず、唯他力難思の利益常没得度の法則なり。然れば行者の信心を踊躍の貌に示し、報仏の聽許を金聲の響にあらはして長眠の衆生を驚かし群迷の結縁をすゝむ。

と。一遍が江州守山にあつた時、東塔桜本の重豪との間に踊躍について歌の問答があつた。「絵詞伝」の方は場所は関寺、名は寡聡になつている、こちらの方が具体的に描写されているから、史実であろう、二祖が随逐していて誤ることもないと思うからである。しかし守山でも重豪に面晤それに似た問答があつたのである。しかし踊躍念仏を基礎ずける思想根柢は証空の「喜びの念仏」を承け、一遍の頭の弁殿への返事に「たゞかゝる不思議の名号をき得たるをよるこびとして」といい、当体一念の称名は同時に歡喜の念仏であつた。一遍に見参したことが機縁になり寡聡は念佛の行者となつたことが傳えられている。

さきの歳末別時は「伴野の市庭の在家にして」とあり、踊躍は「同国小田切の里、或武士の屋形にて、聖をどりはじめ給ひけるに、道俗おほくあつまつて結縁あまねかりければ次

第に相統して一期の行儀と成れり」とある。その同じ歳末佐久の大井太郎の邸、「數百人をどりまはりけるほどに、板敷ふみおとしたりける」とあり、両絵巻の図を見ても今日のそれと異なることが知られる。「六条縁起」に空也の名とその詞が出てゐるから、当初から空也を追隨する意識が一遍にも、また一般にも信じられていたらしいが、実際には空也は念仏踊りはしてゐないと見られる。

この時の状況を『絵詞伝』第一は「提をたゝいてをどり給ひけるを見るもの隨喜し、きく人渴仰して金聲をみがき鑄させて聖にたてまつりけり。しかれば行者の信心を踊躍の貌に示し、報仏の聽許を金聲の響にあらはしてながきねぶりの衆生をおどろかし群迷の結縁を勧む」とある。『聖絵』第八には美作国一の宮に詣で「樓門の外にをどり屋をつくりておきたてまつりけり」と、厚意をもつて踊躍の行儀が迎えられたことがわかる。第九に四天王寺歳末別時の記事がある。しかも踊躍は一遍の臨終ま近に十八日の朝、「時衆みなこりかきて、あみぎぬきて来るべきよし仰せらるゝとき時衆は庭にをどるよし申せば、さらばよくをどらせよ、と仰せらる。」とある。宗祖の臨終行儀は踊躍念仏だつたのである。命終に臨んで歡喜の声高かに愉悅に満ちてその生涯を終えたのである。「野にすてゝけだものにはどすべし」の遺言を残し、

（未完）